

北九州市 発達障害者支援地域協議会

令和2年1月21日

北九州市発達障害者支援センター

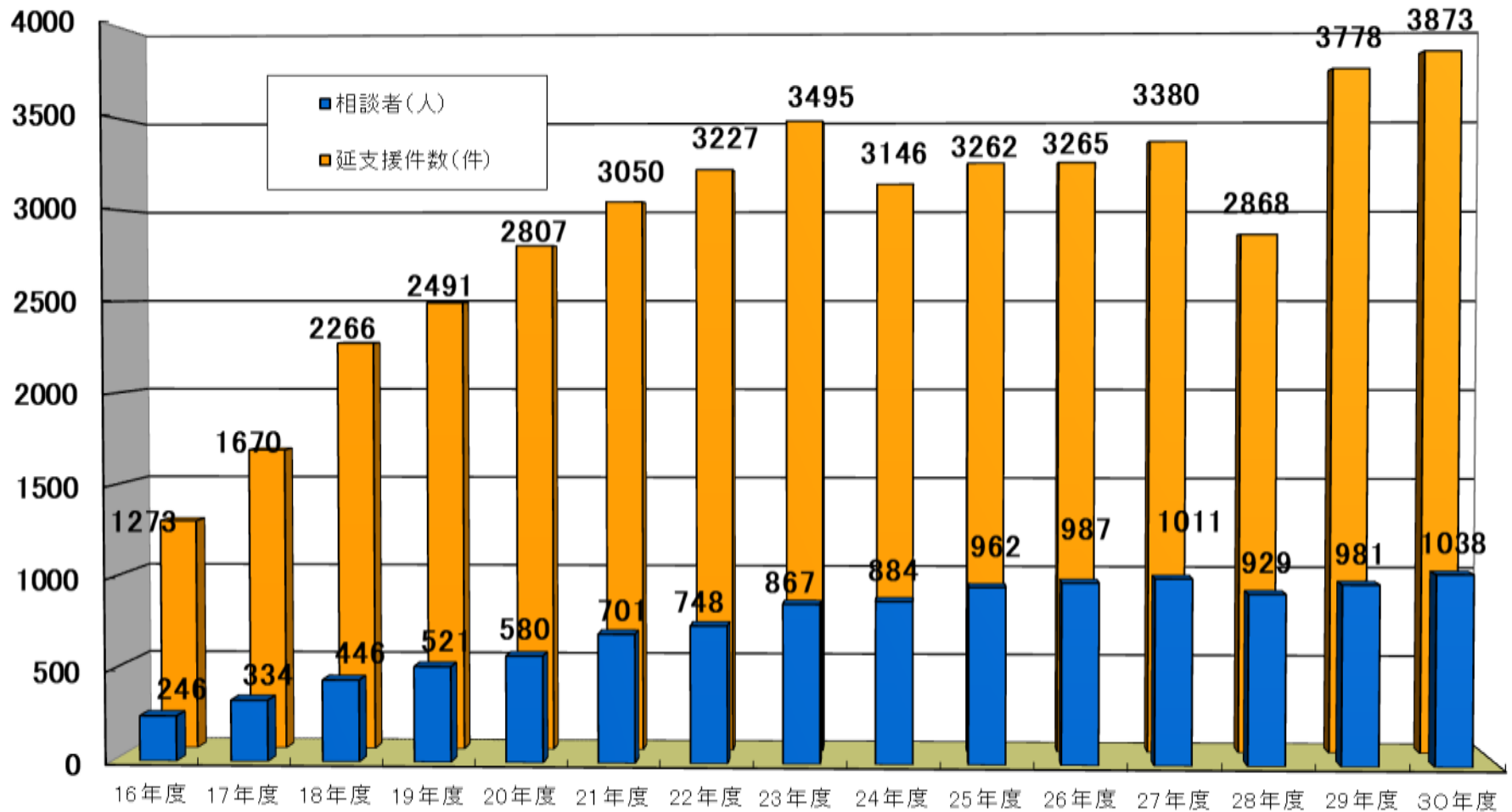
本日の内容

- 相談支援の現状（主として、成人期）
- 各種研修・啓発事業
- つばさの今までの主な取り組み
- 行動障害のある人への支援について
- 今後の取り組み
- つばさの16年間の取り組みから見えてきた課題

業務内容



相談人数・支援件数の推移(16年度～)

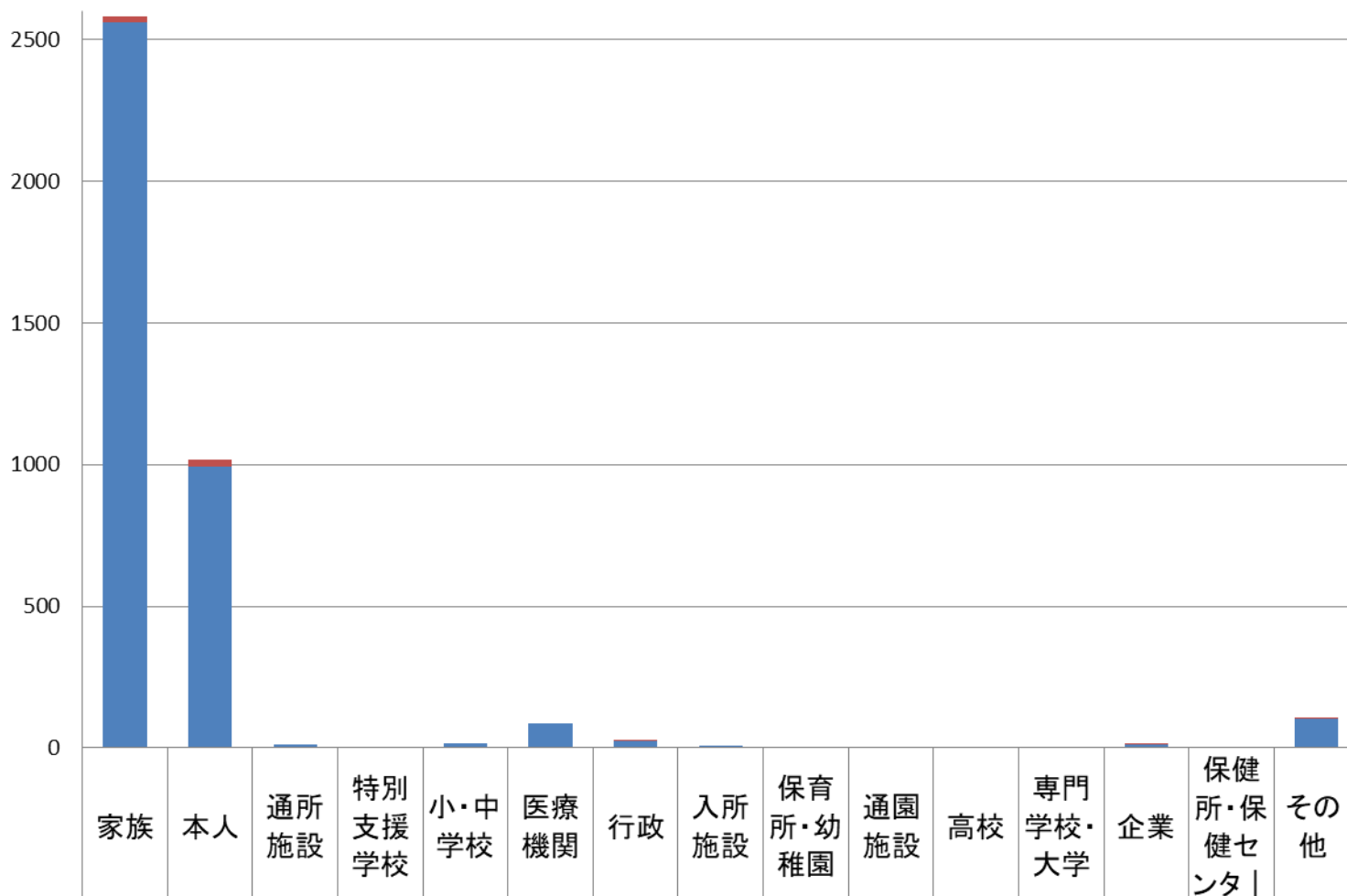


平成30年度延支援件数の内訳

延 支 援 件 数	相 談 支 援 発 達 支 援	3822
	相 談 支 援 就 労 支 援	5 1
合 計 (件 数)		3873

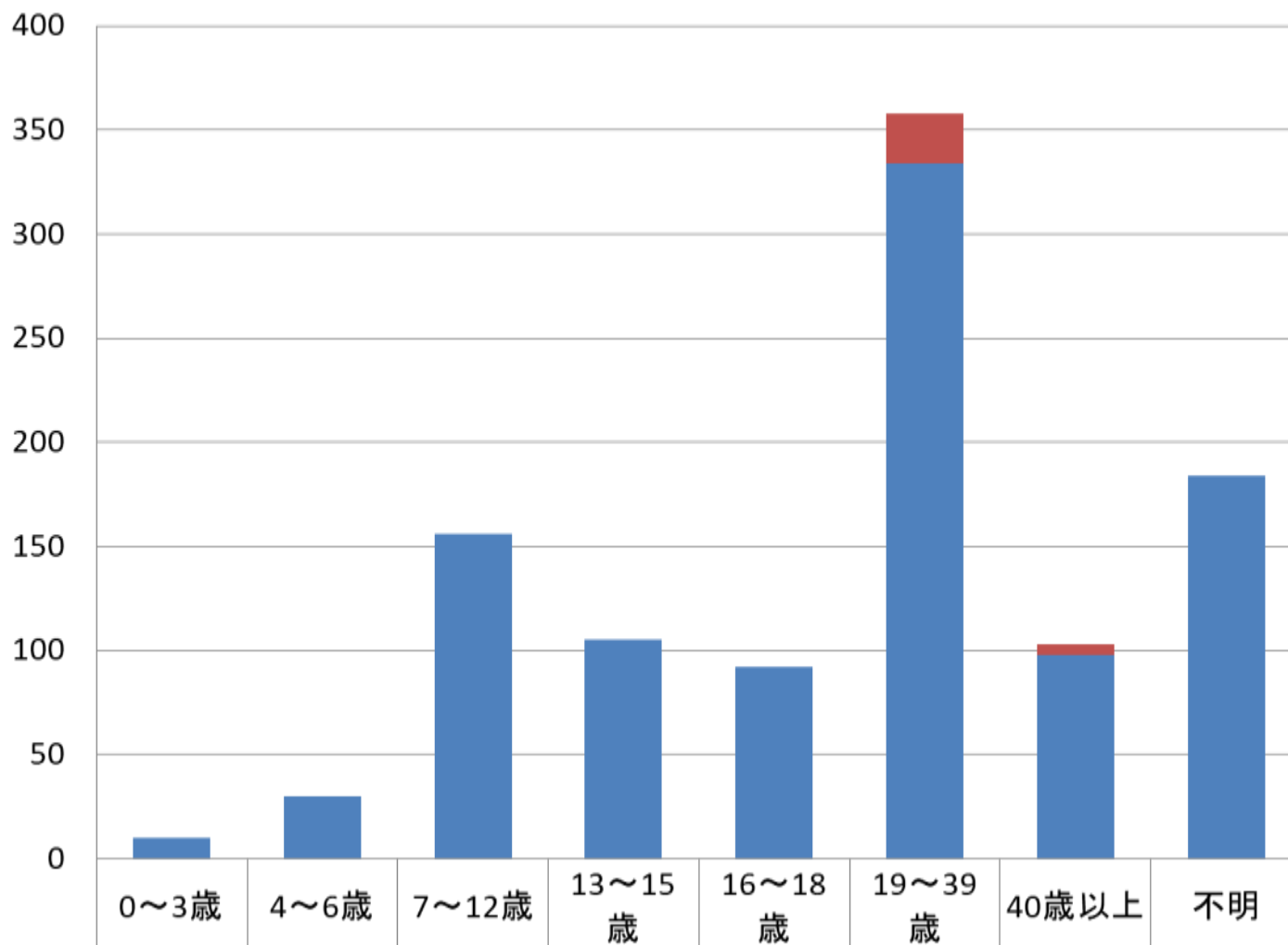
「相談支援」の相談者の内訳（延支援件数3873件）

「相談支援」における主な相談者



■ 相談支援・就労支援	20	24	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0	2
■ 相談支援・発達支援	2560	994	10	0	16	86	24	6	3	0	4	2	13	1	103

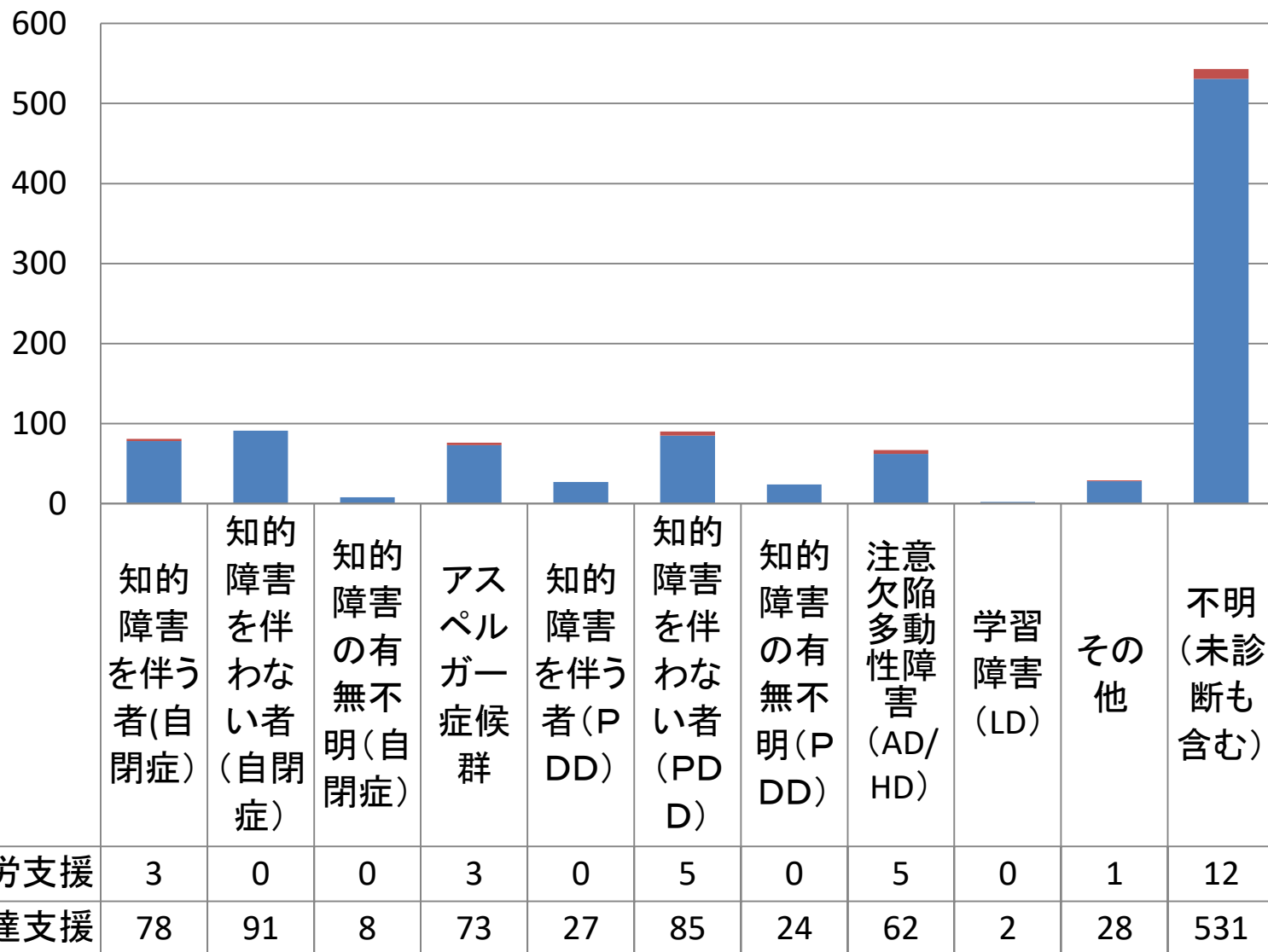
平成30年度対象者の年齢層(実支援人数1009人)



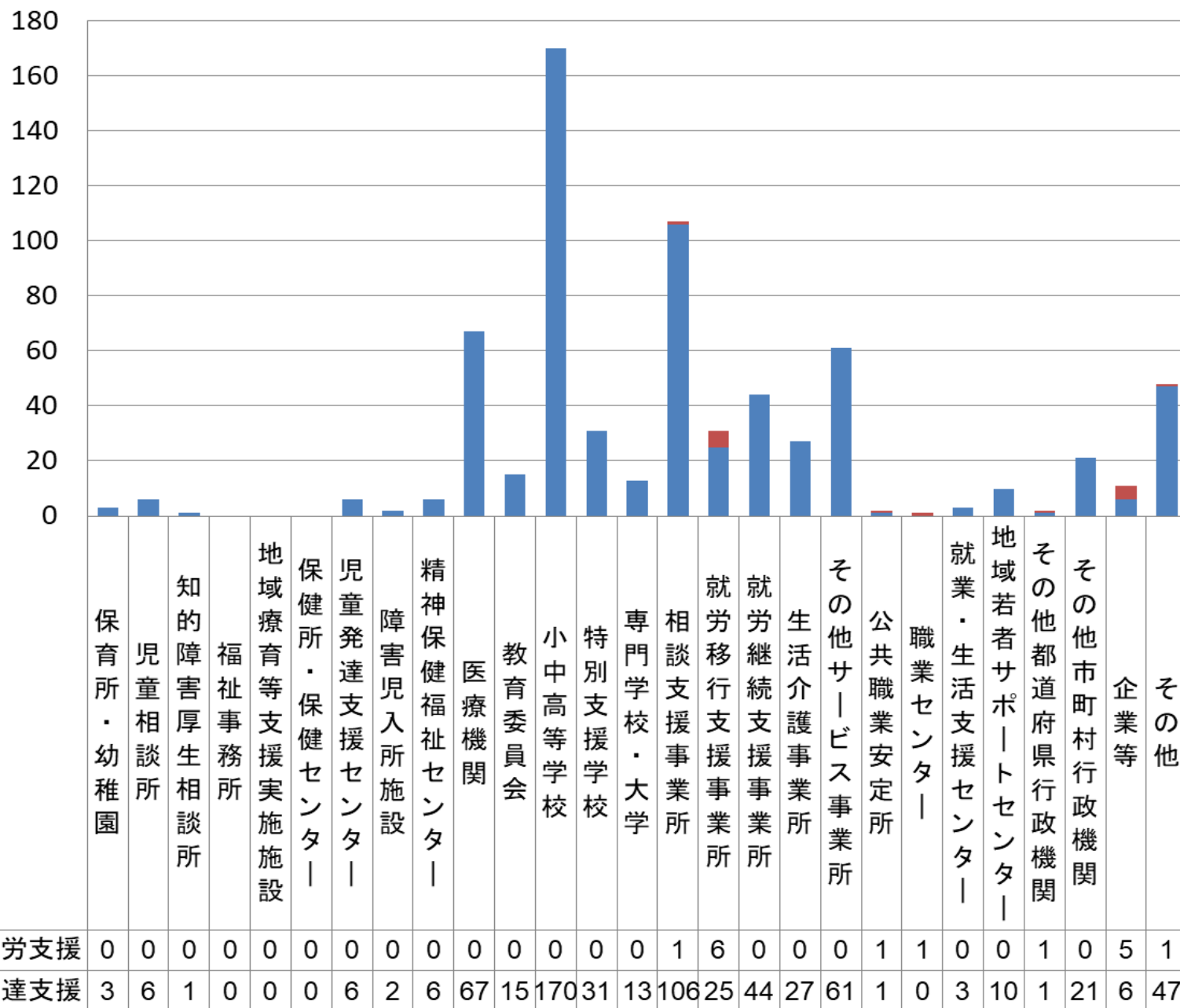
■ 相談支援・就労支援	0	0	0	0	0	24	5	0
■ 相談支援・発達支援	10	30	156	105	92	334	98	184

障害種別(実支援人数1009人)

※医師の診断名でカウント



連携先の機関



小学生～中学生に多い相談

- 情報提供（医療機関、療育機関等）
- 不登校
- 親の対応方法
- 家庭内暴力
- 学校での対応について
- 依存症（ネット、スマホ、ゲーム等）への対応

高校生～大学生に多い相談

- 情報提供（医療機関）
- 学業維持のための相談
- 親の対応方法
- 将来に向けての相談
- 就労に関すること
- 依存症（ネット、スマホ、ゲーム等）への対応

成人期に多い相談

- 情報提供（医療機関）
- 就労に関する相談（就職希望・就労維持）
- コミュニケーションに関すること
- 通う場所について
- 二次障害への対応
- 対応方法
- ひきこもり
- 夫について、妻について
- 依存症（ネット、スマホ、ゲーム、買い物等）への対応

小学生からの関わり:Aさん

- 男性:25歳
- 小学校時に「高機能自閉症」と診断
- 小学校(通常学級⇒通級指導教室⇒特別支援学校)
- 本人の希望により、中学校より地域の学校
- 高等学校(支援あり)⇒大学⇒自宅
- 本人は、つばさへの相談は必要を感じていない。家族が困っている。(定期的な面談)

高校生からの関わり：Bさん

- 男性：27歳
- 小学校時に「アスペルガー症候群」と診断
- 中学校時代は、週1回スクールカウンセラーと面談を行う。
- 高等学校入学後は、スクールカウンセラーとの面談は難しくなった。そのため、つばさにて月1回面談を行う。（本人は必要を感じていない）
- 現在は、就労中。（本人から必要を感じる）

大学卒業後からの関わり:Cさん

- 男性:32歳
- 小学校～高等学校:成績優秀、イジメに合う
- 大学はカウンセラーに相談しながら、卒業。
- 就職できず、アルバイト。
- つばさへ、カウンセラーより繋がる。
- 就労移行支援事業所を利用して就職するが、注意されると、フラッシュバックが頻発し、離職を繰り返す。
- つばさには、定期的に来所。(状態は不安定)

40歳から相談：Dさん

- 女性：42歳（既婚）
- 以前から「優先順位が分からない」「時間の管理ができない」「仕事の手順は自分なりのやり方でしたい」ということが多かった。
- 仕事で臨機応変な対応が出来ず、周囲に迷惑をかけ、関係がよくない。
- インターネットで調べると、「ADHD」かもしれないと思った。
- 医療機関に行くべきか悩んでいるため、つばさに相談したい。

各種研修

- 発達障害者支援のための初級セミナー
- 発達障害者支援のための実践セミナー
(「発達障害児者の理解と対応」、「生活の中の感覚統合」など)
- 発達障害シンポジウム
- 行動障害研修会(3日間)
- 構造化セミナー(2日間)
- 就労セミナー
- 家族のための勉強会
- 実践報告会

} 講義・演習

など

今までの主な取り組み

平成18年度	小冊子「発達障害の理解と支援Q&A」を発行
平成19年度	リーフレット「知ってほしいな発達障害のこと」作成
平成20年度	医療機関へのアンケート調査実施
	成人期当事者会（ソーシャルクラブ）の取り組み開始
平成21年度	「世界自閉症啓発デー」の取り組み開始
平成22年度	サポートファイル「りあん」普及開始
平成24年度	ペアレント・メンター養成

今までの主な取り組み

平成25年度	家族を対象とした研修会（フレッシュコース）開始
	成人期の生活支援プログラム（所属がない方）開始
平成26・27年度	行動障害研修会開始
	青年期ワークショップ開始
	保護者座談会（メンター参加）開始
平成28年度	アセスメントツール開発事業開始
平成29年度	中学生ワークショップ事業開始
平成30年度	行動障害家庭支援事業開始

～人と支援をつなぐ～

サポートファイル

り あ ん



「りあん」とは？

「りあん」とは、フランス語で ^{きずな}「絆」を意味します。
つながりを広げながら、よりよい支援に役立てていけることを願
って作成されました。

北九州市

サポートファイル「りあん」

- 親の会等の関係団体の代表、北九州市発達障害者支援体制整備検討委員会・連絡協議会の委員、市、つばさが何度も話し合いを重ねて作成。2度修正。
- 「りあん」そのものがアセスメントになり、「家庭」「学校」「事業所」「相談支援専門員」等が共通認識できるツール。
- 他のアセスメント(MSPA,WISC,PEP等)を基に、りあんを作成することもできる。

平成31年度自閉症啓発デー チャチャタウン小倉



点灯式



小倉城
ブルーライトアップ



観覧車
ブルーライトアップ

ペアレント・メンター

- メンター(mentor)とは、「信頼のおける相談相手」という意味
- 発達障害のある子どもを持つ親が、一人で悩まなくてもすむように、地域で当事者同士の支え合いを推進することを目的とする。
- 日本自閉症協会が2005年度から養成を続け、現在は自治体がその役割を担い始めるようになった。

北九州市のペアレント・メンター活動

- 平成26年度より本格的に活動スタート
- つばさ主催の「診断後間もない時期の保護者勉強会」
子育て体験の話し・グループ相談
- 区役所主催 子育てサポーターやボランティア向け研修会
子育て体験発表
- 児童発達支援センター保護者勉強会
サポートブック作成・子育て体験・将来に向けて
- 相談カフェ(1丁目の元気・もやいカフェ)

など

※つばさが同行(同席)

成人期在宅の方を対象とした 生活支援プログラム

- つばさに継続相談がある在宅の発達障害のある方
- 頻度は人によって異なる。(2週1回～月1回)
- つばさスタッフと一緒に、軽作業やパソコン等を行う。
- 次ステップ(福祉サービス事業所等)へつなぐための、一手段。

行動障害(知的障害のある人)

- 重篤な行動障害の相談数は多くはない。(10ケースくらい)
- 自傷(顔を叩く・壁や床に頭を打ち付ける・手や腕を噛む等)、他害(人を叩く・蹴る・噛みつく等)・破壊・泣き叫ぶ・パニック等
- 学校や放課後等デイサービス事業所等では、ほぼマンツーマン対応。
- 家庭では、学校や事業所と同じ対応はできない。

行動障害(知的障害のある人)

- 所属機関がなく、家で家族がみているケースもある。
- 親も限界。(叩く・蹴る・大声・かんしゃく等)近隣から苦情も。
- 感覚面(主として聴覚、視覚もある)、不安が強いASD者が、人数の多い集団生活はきつい。
- その結果、外に出られなくなったり、外に出てもパニックになることもある。
- 気象状況(気圧)に影響される人もいる。

行動障害（知的障害のある人）

- あまりに重篤な場合は、精神科病院に入院する。（閉鎖病棟・保護室）
- 退院して家庭に戻ると、しばらくすると元の状態になる。
- どこにも通うことができない人の支援は、どうすればよいのか。（相談機関はどのように支援すればよいのか⇒医療機関を含めたチームで取り組む）

知的障害・行動障害のあるASD者の 母親へのインタビュー調査結果より

- 子どもに合った対応を見出そうとする
⇒「知識の習得」「視覚的に伝える」「表出する手立てを講じる」
- 専門家のアドバイスを求める
- 子どもが安定する手立てを講じている
⇒「意思を尊重する」「好きな活動を保する」「こだわりにつき合う」
- 「母親の気持ちを理解してくれる担当者の存在」と「気兼ねなく話せる場」があることに、下支えされていた。

知的障害・行動障害のあるASD者の 母親へのインタビュー調査結果より

＜支援者は＞

- 知的障害があり行動問題があるASD者への指導・支援方法を習得する。⇒**母親へ現実的・具体的なアドバイス**を行う。
- 母親の大変さや悩み等を理解し、寄り添うことが重要。また、親の会や親の集まり等、母親に『気兼ねなく話せる場』を情報提供する。
- 担当者ひとりで抱え込むのではなく、医療やより専門性の高い専門家の存在が必要な場合もあることを認識する。

知的障害・行動障害のあるASD者に対応している生活介護事業所スタッフへのインタビューより

＜本人への支援＞

- 個人からプログラムと活動を作る
- 本人が一番分かりやすい手段（具体物・文字・絵・IT等）で伝える
- 本人が自分の気持ちを伝える手段を用意する
- 自己選択する支援
- 行動問題には、応用行動分析の手法を使う
- 親以外の人（ヘルパー等）と余暇活動する経験を積む
- 幼少期から療育（構造化、PECS等）を利用する

行動障害のある人に関する課題

- 対応できる人材・事業所が圧倒的に少ない
- 非常に悩んでいる学校・事業所・相談機関は多い
- 家庭でも施設でも病院でもみれない人は、どうしているのか
- 中間施設のようなものなのか、研修システムや既存の事業所に利点を付けて依頼するのか
- 市の喫緊の課題として取り組むべき

今後の取り組み

- 親が学ぶ場（フレッシュコース）
- 親の居場所作り（メンター座談会・相談カフェへの協力）
- 本人理解と対応の習得（各種研修会）＋行動障害に対応できる人材育成
- 生活支援プログラム
- 当事者の集まり（各年代）
- 成人期の方のコミュニケーション練習（個人・グループ）⇒本人が好きな活動を通して、練習することが効果的といわれている。

課題

- 学齢期～青年期までの本人が学ぶ場
- 当事者の居場所作り(各年齢に応じて)
- 不登校児の居場所
- 高校生・専門学校生・大学生へのキャリア教育(教育機関と相談)
- 機関コンサルテーション強化(市の指導強化)
- 就労できる企業(企業側への働きかけ)
- 行動障害への対応強化(喫緊の課題)

※つばさが全て担える内容ではないため、市全体で取り組む。